

夢さめぬればあけぼの空

あだなれや六十八とせの夢さめて

けふなりはつるさくらぎの花

あだなれや我が身はこまのいとさはし

糸きれはつるけふをかぎりに

かぎりありいとされはつるこまみれば

何にさはらんものとせしむる

右七首

按ずるに、長久院殿は女子たるのみならず。天文・天正の亂國に誕生し給ひ、戰國の最中にて文學は絶えたる如き時世といへども、歌學に長じ、一風の詠歌其の氣性各首の歌意にて知られけり。おもふに、利家卿の簾中なる芳春院殿も、長久院殿と同時世の誕生にてありしが、歌學に長じ給ひ、殊に如見より古今傳授までし給ひたりとかや。

○長久寺門

此の寺門は、甚だ些少なる門なりしかど、俗に飛驒の工の作なりといひ傳へ、其の名高し。此の門は昔當寺大豆田に在りて、栖覺寺と稱せし頃のものなりしを、此の泉野寺町へ

移轉せし時、爰に移せりとぞ。その由縁等は詳かならずといへども、古來飛驒の良工が作にて、釘を用ひず作れりといひ傳へたり。

○妙布山立像寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基往昔日像上人、永仁二年に佐渡國より花洛へ被寵越砌、越前國に立像庵を被結置、此庵をば日治代に被取立、妙布山立像寺と號す。永祿元年利長卿、越前國府中より加賀國松任藤岡城へ被爲入。其砌日治御跡を奉慕罷越、寺地拜領任。只今小松玉樹山立像寺是也。越中守山へ御移之頃、御跡を奉慕越中へ罷越、又寺地拜領任。只今高岡妙法山立像寺是也。同國富山へ御移之砌も、御跡を奉慕罷越寺地拜領任。只今富山妙法山立像寺是也。天正十一年金澤御入城之砌、御跡を奉慕、寺地河原町に而拜領任候處、御用地に相成、泉野寺町只今之屋敷千四百歩拜領任候。且壽福院殿越前府中に御居住之砌、御菩提所は同所花岳山經王寺之處、微妙公能州瀧谷妙成寺御再興、此時住持日條上人は、壽福院殿御伯父之由にて、御當地に由緒之寺有之候はゞ、壽福院殿御佛詣

可被遊旨に而、立像寺儀は、越前府中以來御跡奉慕由緒之趣、小幡右京・同下野より言上有之。依之材木御寄進、右兩人承に而、只今之寺御建立被仰付。とあり。按ずるに、右由來書に、天正十一年金澤御入城之砌、寺地河原町にて拜領任ると載せたるもの、慶長年中の過聞なるべし。利長卿金澤入城し給ふは慶長四年也。龜尾記にも、立像寺は、慶長年中微妙公御母堂壽福院殿より同寺號四ヶ寺建立の一ヶ寺也。所謂四ヶ寺は、金澤・小松・高岡・富山なり。皆立像寺と呼べり。壽福院殿は小幡氏にて、定紋は松皮菱なり。今立像寺の欄間には是を彫物になしたりと。是等にも立像寺は壽福院殿の造立なりし事知られけり。

○立像寺亂塔奇事

咄隨筆に云ふ。寛文の末にか有りけん。犀川野田寺町の團子屋へ、毎日暮合頃、色青々としたる女、錢二文宛持來て、白き餅を買行きける事二三日也。何とも心元なき女人哉と氣付きける程に、亭主跡を慕ひて行きければ、立像寺の門の方へ行くかと思へば消失せけり。甚だいぶかしくおもひ、門をたゞきて内へ入り、右のやうすを語りければ、住持聞

きて思ひ當る事あり。此頃妊婦の死したるを土葬にして此寺内にあり。いかさま心元なき次第なりとて、急ぎ告知らせて、翌朝墓を掘起しければ、椀の内に赤子あり。靈骸の廻りには、毎日買來り取行きける餅其儘五つ六つ許ならべてあり。扱こそと不思議の思ひをなし、赤子を取上げそだてけり。男子にて存命しけり。母の十七年忌の作善をするに付我等も參詣すと、寺西庄兵衛の家人何の十兵衛といふ者、貞享四年の頃三の丸御番所にて語りしなり。とあり。今按ずるに、貞享四年より十七年前は、寛文十一年辛亥に當れり。妊婦の歿せしを土葬となし、墓墳の中にて出生し、其の兒存命の事相知れ、掘出し養育して成長せし傳話は、いにしへより彼是ありつれば、實事なるべし。

○相撲阿武松建石

立像寺門内にあり。石面に阿武松緑之助と彫刻し、碑陰に左の如く彫刻せり。

阿武松於三都相撲相勤大略記

文化十二年柁町十丁目於心法寺社内大相撲興行。此時小柳長吉上口載。同十三年上二段上。同年三段上。文政二年